

埼玉県さいたま市緑区、浦和くらしの博物館民家園訪問記。

二〇一七年六月一七日（土）。

以前、東京都小平市の「小平ふるさと村」や、世田谷区の「次大夫堀公園民家園（じだゆうぼりこうえんみんなかえん）」に訪問したことがあった。数軒の古民家を移築、展示して公園にしており、多くの人を訪れていた。埼玉県のさいたま市にも「浦和くらしの博物館民家園」という施設があることを知った。

この民家園は市内の伝統的な建物を移築復原しており、一九九五年（平成七）に開館し、七棟の建物を公開している。「旧蓮見家住宅」、「旧野口家住宅」そして「旧高野家住宅」と「旧綿貫家住宅」。また「旧浦和市農業協同組合三室（みむろ）支所倉庫」も公開している。園内は公園施設として無料で開放しており、また見沼田んぼの中央に位置することから、四季それぞれの風景も楽しめる。

JR浦和駅東口から国際興業バスに乗車して、「念仏橋」で下車すると、道路を隔てた向こう側に民家園が見える。私が訪れたその日は、どういう訳かバスが遅れており、駅のバスターミナルに掲載されている時刻通りに到着せず、十五分以上遅れて到着した。更に念

仏橋までかなりの時間乗車した。土曜日だから渋滞していたのか、それともさいたま市のバスは慢性的な渋滞に巻き込まれて時刻通りに来ないのか、私には分からないが、他の乗客は皆普段通りに乗車していた。

最初の「旧浦和市農業協同組合三室支所倉庫」は、大谷石と漆喰の土蔵造りで瓦屋根の石蔵である。農協の倉庫だったときは、主に米を収納する倉庫だった。それ以前は栃木県の小山市で一九一九年（大正八）に、かんぴょうの倉庫として建てられた。そしてその後一九五六年（昭和三一）に農協三室支所の倉庫として移築された。その後長く三室支所の倉庫として使われていたが、一九九四年（平成六）に当園に移築された。移築されて二〇年以上経つが、石造りの壁は経年を感じなかった。

次は「旧高野家住宅」である。この家は旧中山道沿いに建っていた商家で、道に面した店舗部分のみを移築した。「煎餅屋」の暖簾がかけてあるが、元々は煎餅屋ではなかった。棟札等がないので詳しいことは分からないが、言い伝えによると、安政の大地震（一八五五年 安政二）の際に建築途中で少し傾いた。建築手法からそれとは矛盾せず、江戸時代の末ごろの築と言われる。高野煎餅店がこの

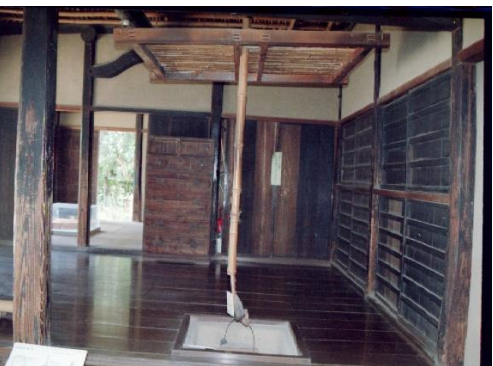
店を買ったのは、明治後半になってからで、それ以前は傘屋だった。市の指定文化財でもある。内部に移築前の写真がある。その屋根は瓦であり、明治の末ごろに元々茅葺きだったのを切り詰めて瓦にした。大きなガラス瓶に詰めた煎餅が展示してあった。この店で昔使っていた煎餅を焼く金網が展示されてあった。昔はこれで焼いたのだと思いつながら眺めた。この家には屋根裏部屋があつて下から見ることが出来る。そこは荷物置き場として使われていた。よく屋根裏で蚕を飼っており、それが山梨辺りでは兜造りなどに発展したが、ここは商家だったのと、埼玉県では兜造りの影響は受けていない。



白壁と瓦屋根の旧浦和市農業協同組合三室支所倉庫 二番目は茅葺きの旧高野家住宅外観。内部に展示してある煎餅の焼き網。

広場を横切って池の南側にある「旧蓮見家住宅」は、今の時点ではさいたま市内では一番古い民家で江戸時代中期の築。一九七四年（昭和四九）五月三十一日に市の指定文化財に指定され、一九九三年（平成五）に移築された。元々市内緑区の井沼方にあった農家である。土壁も茅葺き屋根も綺麗な寄棟で、間取りは広間型三間取りである。この住宅では屋敷内で馬を飼っていた。以前、福島県の「曲がり屋」集落を見に行ったことがあった。Lの字型の家の一部分が住居で、一の部分が馬小屋という造りの民家があるが、それは岩手県から福島県にかけて分布しており、やはり埼玉県には何の影響もない。

この屋敷には正面に格子窓があり、「ししまど」と言って、イノシシなどの野生動物の侵入を防ぐために作られた。



旧蓮見家住宅外観。この家のシンボルの格子窓。囲炉裏のある部屋。

南側に茅葺きの大きな長屋門がある。「旧武笠家(むかさけ)表門」である。さいたま市指定文化財であり、指定されたのは一九九四年(平成六)四月二十八日で、同年に市内三室より移築された。門の両側が部屋になっている。棟札は無いが、一七八三年(天明三)の護摩札が確認され、それによって江戸時代後期の築と考えられている。この門を開閉するのは、冠婚葬祭の日に限定され、日ごろは脇の出入り口を利用していった。展示してある民具に名札がつけられていて、その中に木製の大きなボートがある。これは市内での洪水用のものである。昨今、日本のあらゆる場所で梅雨時から台風シーズンにかけて川の氾濫が増加しているが、町内や自治体がこういうものを用意しておけば避難しやすくなる。先人の知恵から学ぶことは多い。ここには展示物に名札がついて名前が書かれている。今まで見てきた他の古民家園でもそうだが、地元の小学生たちが課外授業で見学にくるためだ。今は小学生ぐらいから昔の生活を知るために、市内の古民家園を利用して学習する。私たちの頃はそういう授業は無かったし、大体、住んでいる自治体に古民家園自体がなかった。



旧武笠家表門、一番目についた木製のボート、その他の展示物。

その近くに立派な門構えの茅葺き民家が見える。この門自体は元からあったものではなく、後から作ったものである。ここが「旧野口家住宅」である。一九九八年（平成一〇）にさいたま市の指定文化財に指定され、同年移築された。市内南区大谷口（おおやぐち）に建てられていた。先ほど紹介した蓮見家のあった井沼方より西に位置する。

野口家は安楽寺の住職であり、この家は庫裏として使われた。然し一八六八年（明治元）廃仏毀釈によって廃寺になり、市内の大谷口の野口家に移築され、農家の母屋として使われた。

解体時に一八五八年（安政五）の墨書きが確認されたため、約一五〇年前の江戸時代末に建築されたと考えられる。寄棟茅葺屋根で平屋平入り、間取りは田の字型四間取りである。更にせがい造りと

いって、屋根の下にもう一つ小さな屋根を出した造りになっている。
以前飛騨高山の「飛騨の里」を取材したときにこの造りのある合掌
造り民家が飛騨の里に移築されていたことを思い出した。

他の家に比べて屋根の茅が綺麗だが、全吹き替えは行っていない。
棟の所が段になっており、三年ぐらい前に棟と後ろ側をさし茅にし
た。

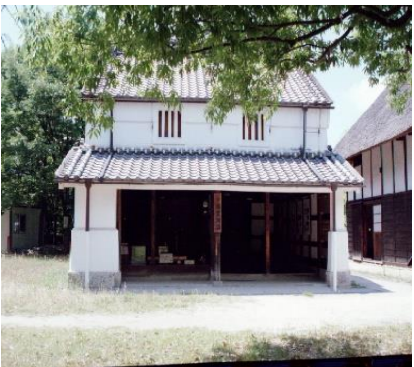


旧野口家の外観、特徴あるせがい造り、内部の部屋。

中央の広場を横切り、最初の旧高野家住宅の隣に白い瓦屋根の家
がある。「旧綿貫家住宅」である。元は旧中山道に面した常盤に建て
られており、屋号を「菱屋」といい、あらもの、肥料、砂糖などを
扱っていた。厚い漆喰壁が特徴で、二階部分に小さな格子窓、「虫籠
窓（むしこまど）」がある。

棟札は見つかっていない。一八八八年（明治二十一）に浦和宿大

火が常盤周辺で発生したが、この大火の時にこの店は壁のおかげで大火を免れたという言い伝えがある。そのため、恐らく明治初期の頃の建築だと推定される。この旧綿貫家住宅も市の指定文化財である。



漆喰に虫籠窓の旧綿貫家住宅、内部にある当時のはかりと金庫。

当日は土曜日だったが、思っていた程の混雑はなかった。ゆつくり園内を回り、説明を受けられた。自然豊かな古民家園で、過ぎし日々の生活に思いを馳せながらゆつくりとした時間を過ごすしてみたいかがだろうか。

尚、この民家園では、その月ごとに「昔のあそび塾」や「古文書講座」等の講座が開催されており、HP上にて確認ができる。

今回、浦和くらしの博物館民家園について検索をしていた時、近くに「旧高野家離座敷（きゅうたかのけはなれざしき）」というのが

あるのを知った。但し、浦和くらしの博物館民家園から公共交通機関を使うとすごく不便みたいだ。博物館民家園のスタッフの方に依頼して車で見に行くことにした。一応、どんな場所なのかネット検索してみたが、住宅地の中にあるとのこと。それは実際に行ってみて事実だと判明した。近代的な住宅の中に建っているのである。

この建物は、赤山街道と呼ばれる道筋に面した旧高野家の敷地内にあつたもので、江戸時代末期の蘭方医、高野隆仙（たかのりゅうせん）が母屋の離れとして建築した。一九八一年（昭和五六）に市の指定文化財になり、一九九八（平成一〇）に市に寄贈され、二〇〇五年（平成一七）に解体修理復原工事が行われた。

文化人でもあつた隆仙は、茶会や句会、当時の知識人との談笑の場としてこの離れを用いていた。隆仙は漢方医高野隆永の長男として大間木村（現在の緑区大間木）に生まれた。後に江戸に出て高野長英に師事し、長英に伴って長崎に行った。蛮社の獄によって捕らえられた師・長英が逃亡した際にはその身を匿った。そのため投獄され一〇〇日にわたる拷問を受けたが、長英の逃亡先については決して話さなかった。この時の傷がもとで一八五九年（安政六）に四九歳で没した。この離れは、当時の文化人の社交の一端を知ること

のできる貴重な建物ではあるが、高野長英を匿ったことで、歴史にも興味深い。

先ほどの浦和くらしの博物館民家園内にあつた旧高野家住宅とは全く無縁である。民家園内の古民家は移築されたものだが、この離座敷は移築ではなく元から建てられていた場所で保存されている。現在でも時々茶会や句会に使われることがあるが、日常的に使っている訳ではない。

中が上がってみることはできないが、床の間のトコとタナの間には「狛（ちん）くぐり」という吹き抜けがある。主室の壁にある「下地窓」から採光をタナの床面に取り入れる工夫がされている。「下地窓」は、土壁の一部を塗り残した窓のことで、隅切りをした窓の外側に明障子を用い、直射日光を遮って陰影のある空間を作った。敷地内には梅雨時だったためにあじさいが綺麗に咲いていた。周囲は近代的な住宅ばかりの中で、江戸時代の佇まいを残す離れを眺め、落ち着いた気持ちで見ることができた。



旧高野家離座敷の外観。左端に下地窓がある主室。三畳の部屋。

利用案内。

浦和くらしの博物館民家園。

住所 〒三三六・〇九二五 埼玉県さいたま市緑区下山口新田一一七
九・一

電話番号 ○四八・八七八・五〇二五

F A X ○四八・八七八・五〇二八

開館時間 午前九時から午後四時三〇分

入館料 無料

休館日 月曜日（祝日は除く）、祝日の翌日（土・日・祝日は除く）、
年末年始

交通案内 JR浦和駅東口から国際興業バス東川口駅北口、大崎園
芸植物園、浦和美園駅行きのどれかに乗車し「念仏橋」下車すぐ。

自動車 東北自動車道浦和ICから約一〇分（八〇台駐車可能）
<http://www.city.saitama.jp/004/005/004/005/003/002/p001856.html>
にて詳細検索可能。

旧高野家離座敷

開館日 毎週土・日曜日。（但し年末年始十二月二十八日から一月四日までは休館）。

住所 〒三三六・〇九二三 埼玉県さいたま市緑区大間木八二・二

電話番号 ○四八・八七八・五〇二五（浦和くらしの博物館民家園）

交通案内 武蔵野線東浦和駅から「馬場折返場行き」「さいたま東営業所行き」「浦和東高校行き」にてバス停「芝原」下車。

浦和駅から「浦和美園駅西口行き」「さいたま東営業所行き」にてバス停「芝原一丁目」下車、徒歩三分。

駐車場はなし。